安永期江戸小咄本からみる死

大村　哲夫

キーワード　　笑話、江戸小咄、死生観、宗教性、安永年間

出家、狩人に出合、そなたは物の命を取て渡世とするハ、わるひりやうけん。此世で其やうにけだ物をころせば、来世て其通りころしたけだものと成り、身をくるしめる。わるひ事ハすゝめぬ。殺生をやめられよ。〔…〕されバ、御異見にまかせ、来世のために貴僧を殺し、坊主に生まれてたすかります。

「狩人」『乗合舟』

はじめに

現代日本人の死生観や宗教観に関わる意識調査[1]によると、特定の宗教は信仰しないが、墓参や寺社参拝は行うという傾向が見られる。「無宗教」を自認する日本人の「宗教」行動にはどのような意味があるのだろうか？　筆者は、人々が特に意識することないこのような心性（宗教性[2]）は、個人が遭遇する災害や人生の終末期などの危機において、その心理的な意味づけや行動に大きな影響を与えるものとして注目している。それではこのような宗教性はどのようにして形成されてきたのであろうか。本稿では特に「死」に関わる宗教性、死生観について論じたい。

近現代日本人の死生観の源流の一つと考えられる近世日本の庶民の死生観研究を試みると、予期に反して困難な作業であることに気付かされる。為政者や宗教者の死生観は、彼ら自身の著作や記録された言動によって今日でも窺い知ることが可能だが、庶民の思想や死生観にかかわる彼ら自身による直接的な資

1　例えば読売新聞2008年宗教意識調査によると、宗教を信じている人26.1%、信じていない人71.9%、墓参をする人78.3%、初詣をする人73.1%などとなっている。
2　「宗教性」にはさまざまな定義が与えられるが、筆者は「個人を超越した存在や問題への合理性に捉れない態度」としている。

料に乏しく、類推することも難しい。そこで筆者は江戸庶民の死生観を知るために、笑話の一種で現代の落語へつながる江戸小咄に注目した。笑話とは、明確な定義は与えられていないが、文学作品のジャンルの一つで、人を笑わせるために作られた滑稽な話のうち、語られることを意識した作品であり、その性格上短編である。

人を笑わせる滑稽な話の記述は、すでに『風土記』や記紀にみられ、『万葉集』（８世紀頃成立）には滑稽な話をして権力者に侍る人物の歌がある。中世には将軍や大名等に仕える「御伽衆」とよばれる職能集団があり、秀吉の朝鮮進発人員表によるとその数は800人にも及んだとされる（小高敏郎1966 pp.3-4）。彼らは権力者に娯楽を提供するだけではなく、彼ら自身が大名や僧侶、豪商といった教養人であり、優れた見識を以て仕える政治や芸術の顧問でもあった[3]。

江戸期に入り平和が享受される時代になると、民衆の間においても滑稽な話が語られるようになる。従前のように為政者や権力者に仕えるのではなく、話芸を民衆に提供する職業的専門家も出現するようになった。こうした笑話は、俳諧、狂歌など他の文芸と同様、上方で起こり、やがて政治の中心である江戸へと伝播し、江戸好み[4]に変化し上方を凌ぐ発展を遂げ、江戸文化を代表するものとなった。

滑稽文学の文学的価値は、従来低く評価されがちで研究も少なく、特に笑話と死生観を扱った研究は管見にして例を見ない。しかし笑話は民衆が民衆自身の愉しみのために製作し消費した[5]ものであり、為政者や宗教者が民衆を教化

3　しかし西洋宮廷の「道化」のように、権力者への諷刺が許容されるほど成熟した関係は持てなかったことが、利休への賜死事件で窺われる。

4　「江戸小咄」の特徴：「多く対話で咄を進め、余韻を後にのこす会話止めでサゲており、省略を重んじた簡潔さが目立つ」（武藤禎夫1987）として、江戸初期に上方で流行した「軽口」とは明確に区分でき、江戸文化の精華とされる。

5　当時の小咄本がどのように利用されていたかについては、『御伽噺』（書苑武子序1773）に次のような「効能」が記されている。

一　第一ねむけさましによし
一　月まち日まちに用てよし
一　座敷のしらけたるニハ、かん酒ニて五ツ六ツ用て吉
一　雨中のつれ〳〵ニハ、いり豆ニせんしちやニて用る時ハ、其徳あること神の　ごとし
此外諸事に用て甚奇妙也

しようとする意図から自由であったと考えられ、当時の庶民における彼ら自身の率直な思想・死生観を知るための有力な手がかりとなりうる。笑いをとることが目的の滑稽文学は、その製作者と消費者の間に価値観の共有がなければ、笑うことができず大衆に受け入れられないからである。また今回対象とした安永期の小咄本には、作者自身が創作した作品は少なく、同好の集いである噺の会などで小咄を持寄りその秀作を採話したり、人気のある小咄を改作して編集されたものが多い。この点からも小咄には、当時の庶民の笑いの価値観が直截反映されていると考えられる。

本研究は、江戸文化を代表する小咄本を、その隆盛期である安永年間に限定して収集・分析し、そこから当時の庶民の死生観を読み取ろうとするものである。

方　法

江戸小咄の全盛期といえる安永年間（1772－1781）に江戸で出版された小咄本のうち、現在比較的閲覧が容易である文献から、収録された各小咄を内容で分類、死に関わる話を抽出し、さらにそれを10の領域に分けて考察した。

安永期に限定した理由は、当時よく売れた小咄本シリーズの一冊である『聞上手三編』の序に「鹿の子出ておとし咄世に鳴る。故に諸家先を諍ふて撰出す」とあるように、江戸小咄の魁となった『鹿の子餅』の出版が、明和九年（1772、同年改元されて安永元年）であり、以降、安永年間の十年に出版された小咄本は134編（宮尾しげを 1971）に及び、大いに隆盛をみていること、しかしながら安永後は、天明の饑饉や風紀・文化を取り締まった寛政の改革の影響で出版が急減し小咄流行は終焉しているため、小咄本の流行は安永年間とほぼ重なることからである。

本研究では、東北大学狩野文庫所収の『聞上手（二編）』、『近目貫』、『再成餅』、『管巻』の４冊、『安永期　小咄本集』（武藤禎夫校注1987）、『江戸小咄集』（宮尾しげを編注、1971）、『咄本大系』（武藤禎夫編1979）、『江戸笑話集』（小高敏郎校注1966）などに所収された小咄本53編に収録されている全ての小咄、

2,843話を対象に分析した。

具体的には、各話をその内容から分析し、死や死生観に関連がある話を「死」、「宗教」、「怪異」の３つの観点で抽出し、そのうち「死」に関わる話をさらに10の領域（表１参照）に分類した。本稿では主に死に関わる話について考察を試みた。

結　果

調査対象の53冊に収録されていた小咄全2,843話中「死」に関わる話（殺人、自死、葬式、寿命など死に関わる話題。極楽、地獄などの来世、呪詛、幽霊の出現、人間以外の死、質入れの隠語も含む）は、298話あり、これは全体の10.5%に当たる。（また「宗教」に関わる話（寺社参拝、僧侶・神官など宗教者。神仏・七福神などに宗教に関する話題。宗教習俗・暦・占いも含む）は388話13.6%、「怪異」に関わる話（荒唐無稽な話題。雷・鬼・化け物など不思議な事象のうち宗教的要素の強くないもの。人間以外の生物、無生物が口を聞くなどを含む）は307話10.8%となっている。附表参照）

この298話の「死」に関わる話を以下の10の領域に分類したところ、次のような結果が得られた。

表１　安永期江戸小咄本に見られる死に関する話の分類

分類	殺生（うち人）	自死（うち心中）	臨終・死	寿命	葬儀・年忌	死後世界	幽霊	性	死生観	その他	計
話数	108 (88)	42 (13)	42	38	37	27	25	6	2	20	310
%	37.1 (30.2)	14.4 (4.4)	14.4	13.1	12.7	9.0	8.4	2.0	0.7	6.9	105.8

（重複分類含む）

各領域の分類基準と代表的な話を以下に挙げる。

1.「殺生（うち人）」：殺人、決闘、仇討、処刑、呪詛など殺生に関わる話。猟など人以外の殺生も含む。108話。その中、人に限定した話は88話。

剣術の師匠、「すえ切といふ手の内をして見せん」といへバ、弟子ども、是ハ先生、拝見いたしたい、成ほど〳〵、しからバ、明日人ごミの所へいつてから、往来のもの、いづれにても御のぞミしだい、すへ切にして見せ申さんと、弟子どもを同道して、人どをりへ出、待て居て、アレ、あそこへ来た男をきつて見せふと、先生立向ふて、抜くぞと見へしが、刀をさやへ、何事もなし。弟子ども、いかがとおもふ内に、おとこ七八軒あゆミしが、首ハ前へころり。あとから、モシ〳〵、くびが落ちました。

「すへ切」『聞上手』（『噺本大系第９巻』pp.67－68）

2.「自死（うち心中）」：切腹・身投げなど自死に関わる話。42話。うち心中に限定は13話。

鯉、ふなの娘と密通し、水中のたゝずミ成かたく、言かわせしも水のあわ、いつそ死るがましじやとて、ひれとひれとをからミ付け、網うち船へひらりとはねこむ。

「水中の恋」『楽牽頭』（『噺本大系第９巻』p.27）

3.「臨終・死」：病、事故、老衰などによって死ぬ、または死にかかる話。動物などの殺生によらない死を含む。42話。

しごとしのおふくろ、大病なれバ、友だち見廻に来て、どふだの、おふくろめしでもくへますか。イヤモウ、わたしもこんどのわづらひハ、おいとまごいじや。はやくおむかいがくればよふござる。ナニサ。お迎のなん

のと、そんな奢つたことをいわずとも、つゝかけていきなさい。

「御迎」『聞上手』（噺本大系第９巻 p.68）

４．「寿命」：寿命に関わる話。長寿にあやかるなど。38話。

八十の賀の祝ひによばれて、〔…〕百迄の御寿命ハたしかにお受合申スといへば、亭主色をかへて、それハむごい御挨拶。賀のいわひニ百までと限つての御祝しハ、満足に存ぜずと、にがり返れバ、客人めいわくして、イヘサ、わたしが申たハ、四文銭でのことで御ざります。

「賀の祝」『聞上手二編』（狩野文庫 p.16）

５．「葬儀・年忌」：葬儀、年忌、命日などの儀礼に関わる話。37話。

神道者の親父が死んだ時、くやミに行き、扨おやじ様ハ此間、高間が原へ御出なされましたげな。おちからおとし、申しませうやうもござりませぬとの口上。おもしろし。おれも其通にやらかそうと行、扨おちから落し、申しませうやうもござりませぬ。親父様ハ此中、うねめが原（筆者註：街娼出没地域）へお出被成ましたけに御ざる。

「悔」『鹿の子餅』（噺本大系第９巻 p.10）

６．「死後世界」：極楽、地獄、往生などあの世に関わる話。27話。

私どもハ、日〻の家業せわしきゆへに、稼の事はかりにかゝり、後生のことハすてをきます。さぞや未来ハろくな所へハ参るまい。せめて朝ばんハ念仏の一ツへんづゝも申たい物でござる。それに引きかへ、おまへがたハお堂で常念仏を御つとめ、唱名の絶へまなく、さぞや来世ハよい所へ御生まれなされませう。御うら山しい事といへハ、はて、埒もない事をいわつしやる。毎日毎晩の事、もふ〳〵あきはてました。わしか願ひでござる

が、どふぞ死きわにハ三日ほど、念仏を申さすに死にたふござる。

「常念仏」『茶のこもち』（噺本大系第10巻 p.39）

7．「幽霊」：幽霊、死霊にかかわる話。生き霊、化けものは除く。25話。

中てうのなじミがしんでから、どこへいつても面白くない。〔…〕けふハしかも忌日にあたる。かたミ社今ハあだなれと火鉢引寄、有りし文ども打くべて胸のけふりと立のぼる。なかよりいづるねまきすがた、夢か現かまぼろしか、なふなつかしやとすがり寄つもることのは語りあひ、久しぶりじゃにと屏風を引んとする処へ、からかミ明ケて角のあるやつが、アイお迎でござります。

「幽霊の切」『聞上手二編』（狩野文庫 pp.34－35）

8．「性」：性に関わる話。隠語も含む。6話。

かたいお侍が遊びにおこしなされ、よほど酒が過たと見へて、祝儀の小うたひ一二ばんうたハれたれば、女郎も若者もあきれた顔で座を持かねて、サアお床入とすゝめた時に、しからバいづれもと挨拶して、ね間へはいツたが、あんまりおかしい客じや。あれでハむつ言がをもしろかろと、ミな聞ミゝでうかゝひ居れば、だん〳〵せめよせた時に、女郎が、アゝいきやす、しにんす〳〵といへば、お侍、身も相果る様だ。

「女郎」『今歳咄』（噺本大系第9巻 p.144）

9．「死生観」：死に方についての話など。2話。

おらが内へ来る道心坊が死だ。アノがんぶつな男、そしてきのふ来たでハないか。サレハ、けさまで何共なくて、ついとんし。尤、人のせわにならぬ様に死たいと、兼てか願で有たが、さそいきてゐたら嬉しがろふ。

「頓死」『茶のこもち』（噺本大系第10巻 p.35）

10.「その他」：上記の分類に当て嵌まらないもの。20話。

となりのわかひもの。ふるへ〳〵くる。内の息子、おのしハ大ぶさむそうなりだが、きのふのはおりハどふした。となりのわかいもの、何さ。夕へめくりにハまける。いめへましい。もとでハなし。はおりもぶちころしてしまつた。つんぼのおふくろ、やれ〳〵、そんなせつ生をしないものだ。

「つんぼ」『御笑酒宴』（噺本大系第11巻 p.235）

考　察

1．江戸小咄における「死」の話題は、全体の10.5%であり、その内容も人が人を殺したり、殺そうとする話が、死の話全体の30.2%となっている。これは現代人の感覚をもって見ると、「笑話」という性質の文芸としては高い割合を示していると考えられる[6]。しかしながらどの話も比較的からりとした仕上がりとなっており悲劇性は感じられない。

2．殺人についで多く見られるのは「自死」であり、「死」に関わる話の14.4%にあたる。借金の返済に窮したり、一分が立たないとして切腹や首吊り・身投げをしたり、あるいはこの世で添われぬ男女が心中をする内容である。現代日本では全死者における「自殺」の割合は2.5%（厚生労働省2011）で、諸外国に較べてもその割合が高いことが問題となっている。現代の「自殺」の原因・動機は「健康問題」が最も多く15,802人（警察庁生活安

6　ちなみに現代の死亡者数（2010年）のうち、犯罪による死者は996人（警察庁2011）で全死者数119万7,066人（厚労省2012）の0.1%、死刑による死者は年間数名程度である。
江戸時代の殺人による死者数は不明。また死刑については諸説あるが、本研究対象時期に近い1765（明和２）年には刑死者86名、1781（天明元）年には52名という（「近世中期・幕末期の刑死者総数」『杉田玄白と小塚原の仕置場』）。
江戸時代は、現代に比べ刑死を含む「殺人」が多かったことと推測され、このことが小咄における殺人の話の多さにつながるとも考えられる。

全局生活安全企画課2011）で全体の49.9％、ついで「経済・生活問題」が7,438人（同2011）で、全「自殺」者の23.5％にあたる。現代の「心中」数は明らかではないが、自死の原因のうち「男女問題」から「失恋」を除いた数を、全「自殺」者で除すとおよそ2.4％となり、これ以下の数値になると考えられる。「経済・生活問題」が自死の原因となるのは小咄からも窺われるが、「健康問題」を原因とした自死は全く見ることができなかった。小咄は娯楽を目的とした創作であるから、当時の自死の実態を正確に反映しているとは言えないものの、自死や心中に対する当時の人の関心の高さをうかがい知ることができる。

3.「寿命」についての関心の高さも特徴的である。その殆どは長寿を願うものであり、長生きを厭う話は見られない。安永期には「長寿＝幸福」という共有した認識があったものと考えられる。

4.「葬儀・年忌」も比較的多く、死の話題の12.7％にのぼる。参列の服装や口上などに関わる話も目立ち、重要な社交として葬送儀礼が位置づけられていたことが窺われる。

5.「死後世界」や「幽霊」に関する話が合わせて52話、死の話の17.4％に当たる。いずれも荒唐無稽な話として仕立てられていることが多く、このことをもって当時の庶民が死後の魂の存在をそのまま信じていたとは言えないものの、死後世界や死者の魂に親和性をもっていたことが窺われる。

終りに

調査した小咄に「死生観」そのものを扱った話は少なかったが、他の項目と合わせて考察すると、長寿を願いながらも、経済的や生活に行き詰まったり、世間に顔向けできないと思われた場合には自死も選択する生き方が窺われる。男女関係による相対死「心中」の話には、心中直前に心変わりする笑話もある

が、恋愛に死ぬことを賞揚する傾向がみられる。あの世の話や幽霊譚に見られるように死後も魂の存続を受容しているようで、「死」への親和性は現代に較べて高く、生死の閾は低かったと考えられる。また「人の世話にならぬように死にたい」(「頓死」『茶のこもち』) との願いは、現代にも通じるものがある。

230年前の江戸庶民の死生観は、現代日本人と多くの点で共通点を見いだせる。しかし「長寿＝幸福」と疑いなく信じられていたようであるし、自死の原因に「健康問題」は見いだすことはできなかった。自然科学が未熟で病を得ては長患いすることなく死を迎えた当時の医療が、そうした結果をもたらしたのであろうか。科学や医療が進歩し「長寿」を手に入れた現代において、自死動機の第１位に「健康問題」が挙げられることに皮肉な矛盾を感じざるをえない

今後の課題は、安永期以外の笑話について同様に分析を行うことで、現代日本人の心性につながる死生観を浮かび上がらせていきたい。

文　献

荒川区教育委員会・荒川区立荒川ふるさと文化館2007『杉田玄白と小塚原の仕置場』

荒川区教育委員会・荒川区立荒川ふるさと文化館2009『橋本左内と小塚原の仕置場』

不明1773『坐笑産後篇　近目貫』東北大学狩野文庫所蔵

不明1773『再成餅』東北大学狩野文庫所蔵

不明1777『管巻』東北大学狩野文庫所蔵

警察庁生活安全局生活安全企画課2011『平成22年度中における自殺の概要資料』

警察庁2011『平成22年の犯罪情勢』

厚生労働省『平成22年人口動態統計月報年計（概数）の概要』厚生労働省ＨＰ

小松百亀1773『聞上手（二編)』東北大学狩野文庫所蔵

興津要（編）1973『江戸小咄』講談社

小高敏郎（校注）1966『江戸笑話集』岩波書店

宮尾しげを（編注）1971『江戸小咄集１、２』平凡社

武藤禎夫（編）1965『江戸小咄辞典』東京堂出版
武藤禎夫1970『江戸小咄の比較研究』東京堂出版
武藤禎夫（編）1979『噺本大系第９巻、第10巻、第11巻』東京堂出版
武藤禎夫（校注）1987『安永期　小咄本集』岩波書店
読売新聞2008「宗教意識調査」『読売新聞』2008年５月30日朝刊

附表１　安永期江戸小咄本にみる死生観にかかわる話（1772－1781年）

番号	書名	著者	刊行年	刊行者	話数	死	題	宗教	題	怪異	題
1	話稿　**鹿の子餅**	木室卯雲（木室七左衛門：御家人）	1772（明和９）正月	鱗形屋孫兵衛（江戸）	63	6	挑灯，雪隠，悔，睾丸，十字，朝鮮人	9	俄道心，初夢，上り兜，物知，尻端折，雷，借雪隠，九郎助，比丘尼	3	桃太郎，夜発蕎麦，糞
2	珍話　**楽牽頭**（がくだいこ）	稲穂（笹屋嘉右衛門？：町人）	1772（明和９）９月	笹屋嘉右衛門（江戸）〃	77	12	按摩，水中の恋，首売，子の年，杜若，丑の時参(重)，土のわかれ，庇(ママ，重)，身なげ，島台，藪医，法印(重)	12	仁王，百足，牛王，丑の時参(重)，雷，宗旨論，庇(ママ，重)，大文字，天人，年越，貞髪，法印(重)	11	山師，御寵愛，猿廻し，化ねこ，きよく馬の気のばし，旅人，杜若(重)，手足の論，土のわかれ(重)，船，ろくろ首，年越(重)
3	**聞上手**（ききじょうず）	小松百亀（小松屋三右衛門：町人）	1973（安永２）正月序	遠州屋弥七（江戸）	64	5	女の評判，幽霊，すへ切，御迎，二度添	6	銅の鳥居，厄はらい，どもり，ちか目，比丘尼，こよみふの字，	3	二度の駈，かなもの，風鳥
4	興話　**飛談語**（とびだんご）	宇津山人菖蒲房序	1773（安永２）正月	雁義堂	56	7	鞠，名鳥(重)，文争，祭礼，鋲釘(重)，杉苗，譲金	10	小便，舛罠，寺詣，物前，祭礼，打擲，鋲釘(重)，一富，通夜，一字占	5	飼猫，名鳥(重)，紋所，用意，鸚鵡
5	楽牽頭後篇　**坐笑産**（ざしょうみやげ）	稲穂序	1773（安永２）正月序	蘭秀堂（笹屋嘉右衛門，江戸）	84	16	鶴，折介，願人(重)，中の町，朝帰り，神木(重)，昔の後悔，十文字，浪人，初もの，梅の木(重)，奴そり打，四十七人，花見，はんごん香，四十七人，大工(重)	11	馬鹿，願人(重)，占，神木(重)，大仏，梅の木(重)，布袋，栄螺，弁天(重)，茶の湯，しわんぼう(重)	13	銀八，年越，占，弐朱銀，梅の木(重)，弐朱銀，一家へ注進，鴨，弁天(重)，眼の玉，大工(重)，馬士，しわんぼう(重)
6	俗談　**口拍子**（くちびょうし）	軽口耳祓	1773（安永２）正月跋	耳祓板	86	9	隠居夜這，まき，下駄屋，こしぬけ，後家，関羽(重)，天窓の池(重)，上下借，医の年ン数，了簡違	13	恵方参，観音の告，夷福神，さいてくりやうの哥(重)，関羽(重)，麩うり，竹田の肴，坊様，うなぎ，念ぶつかう，こんのたび，願かけ，雪隠	10	犬のねごと，雷，節分，田舎のやねや，さいてくりやうの哥(重)，天窓の池(重)，虎，仙人のとりちがへ，栗，金魚，
7	落咄　**今歳咄**（口拍子二篇）（ことしばなし）	書苑武子（青木宇千）編	1773（安永２）正月序	文苑堂	69	10	辞世，幽霊，ねつミ(重)，仕あひ，立合ひ，薬食，女郎，恋，葬，ためしもの	9	忍ぶ恋，うそつき，卜者，すり木，横の門，名所，薬食，様，ゑびす	16	ぢゞとばゞ，ふくらふ，ちりめん，唐の雀，（無題ゑだるとぬり樽，竜宮の日待，サア〜），ねつミ(重)，つゞみ，鼠，入道，虫ぼし，行あひ，仙人，牛，ひるね

番号	書　名	著　者	刊行年	刊行者	話数	死	題	宗教	題	怪異	題
8	**聞上手二篇**	小松百亀 （小松屋三右衛門：町人）	1773 （安永２） 三月序	遠州屋弥七 （江戸）	55	6	新躬，蛸の夢，賀の祝，庸医匕，文字，幽霊の切	2	間違，はなし	8	土器喰，雷，反魂香，鳶と烏，世話好，猩々，謎，蛇と蛙
9	**聞上手三篇**	小松百亀 （小松屋三右衛門：町人）	1773 （安永２） 閏３月序	遠州屋弥七 （江戸）	64	5	頼母子（重），心掛，介錯，うわばミ（重），せんじ茶（重）	7	暦，銀の大黒，御膳料，見立，達磨，柱穴，呪ない，	12	新吹，犬の産，見越，白狐，眼玉，犬のとくゐ，雷のやど，頼母子（重），夕立，うわばミ（重），せんじ茶（重），うにかうる
10	坐笑産後篇　**近目貫　三篇** （きんめぬき）	稲穂序	1973 （安永２） 閏３月序	蘭秀堂 （笹屋嘉右衛門 江戸）	93	15	天神（重），強弓（重），御召しの羽織（重），寐ぼう，竜宮（重），茶釜（重），洗ひ髪（重），なら漬，ゑんまの恋，榎，花，酒，安永，大橋，密夫	18	江ノ嶋，田舎和尚，天神（重），花見，目黒参，嫉妬，松茸，祭の祝，新無間，びつこ，仏神，節分，廻向院，赤イ頭巾，暫悦，観音，茶碗（重），雨乞，	17	宇治川，三ツ股，強弓（重），お召しの羽織（重），六味丸，銭同士，拾文銭，竜宮（重），きつね，塩同士，茶釜（重），餅屋の産，洗ひ髪（重），猿蟹，女曲馬，竹藪，茶碗（重），
11	**御伽噺** （おとぎばなし）	書苑武子序	1973 （安永２） 閏３月序	文苑堂	36	4	魂魄，指のかろうと，放し亀（重），年頭	6	京人，だるま，利生の門違へ，狐に付た和尚（重），無間（重），放し亀（重），	6	白雨うり，こハ色，手たゝき，狐に付た和尚（重），無間（重），ばけ物やしき，かぐはな
12	当世口合　**千里の翅** （せんりのはね）	能楽斎序	1973 （安永２） 閏３月序	不明	63	17	雲助，雪隠の敵討，高砂，亀（重），さうれい，高なわ，嶋台，浅草五重の塔（重），医者，浪人，九太夫，むきミ売，仙薬（重），姑ばゞ，賀の餅，鶴亀，	7	音といふ字，浅草五重の塔（重），弁天，和尚，御幸，五音相通，へんじやう男子（重）	10	茶人の目利，亀（重），花さかせぢゞ，積もの，桃太郎，げじ，金のなる木，仙薬（重），へんじやう男子（重），雷
13	**再成餅** （ふたたびもち）	即岳庵青雲斎序	1773 （安永２） ４月	莞爾堂，喬山堂，青藜閣 （江戸）	60	6	掛取，麻上下，催促，役者の女房，駕籠，万年亀	7	福禄寿，米の味，無間の鐘（重），天神，精進日，開帳，むけん茶屋，	2	眼の玉，無間の鐘（重）
14	興話　**飛談語三編** （とびだんご）	亀文子	1973 （安永２） ４月	雁義堂	39	9	地獄，追善，三途，仲満，時宜，舟引，牢人，一角，鰻売（重）	5	通夜，車僧，相撲，鰻売（重），点者，	2	舌切雀，蝦蟆
15	**今歳咄　二篇** （ことしばなし）	太保堂主人 （青木字千）	1773 （安永２）	東都	28	2	字，あんま	4	仁王，石芋（重），泥棒，めし，	2	たこ，石芋（重），
16	**芳野山** （よしのやま）	古喬子	1973 （安永２） ４月序	不明	23	2	路考，蜜夫	1	大仏	6	鼾，貝じやくし，朝がほ，猿，いづなつかひ，師匠

番号	書　名	著　者	刊行年	刊行者	話数	死	題	宗教	題	怪異	題
17	**出頬題** （でほうだい）	夢楽庵序	1973 （安永２） 夏序	不明	62	4	菊之丞，めくり，きをい，医者	10	むけんのかね，気がゝり，つんぼ，和尚，腰もと，年子，観音，びんぼう神，びくに，七ふく神	8	芥子喰，火の見，夜発，舌きり雀，大食，おどり子，欲心，気位，
18	**茶のこもち**	唐辺僕 （朱楽菅江？）	1774 （安永３） 正月刊	堀野屋仁兵衛 （江戸）	77	12	遺言，悔，忌中，開帳，始末，頓死，常念仏（重），家来，進物，熊，游，茶	11	題目，修ふく，開帳，頓死，開帳，異見，常念仏（重），末世，了簡，塔，東北，	4	中洲，飛脚，朝臾，子息，
19	**和良井久佐** （わらいくさ）	千三造 （鉄砲洲の住人）	1774 （安永３） 正月刊	鈴木嘉兵衛 （日本橋四日市）	31	5	俄分限，大井川，身投，大剛，異見，	6	手の節見，神道者，雪沓，大嵐，若後家，下座の噺	1	爺なし子，
20	新口　**稚獅子** （おさなじし）	千三ツ万八郎序	1774 （安永３） 正月刊	万笈堂・文林堂	74	4	すつぱ抜，身投，提灯，釣（重），	10	観音，庚申（重），大黒，在郷者，医師，福湯，さんげ〳〵，起上小法師，植木，金持（重）	12	蚤卜虱，挟ミ虫，きつね，庚申（重），餅噺，弐朱銀，牛部や，犬，釣（重），小刀，くわゐ，金持（重）
21	**富来話有智** （ふくわうち）	鶏肋斎画餅序	1774 （安永３） 正月序	遠州屋弥七 （江戸）	53	1	極楽，	3	宝舟，舎利，五重塔	6	連哥，大蛸，妙薬，雷嫌イ，雪女，鵺，
22	新口　**花笑顔** （はなえがほ）	竜耳斎聞取	1775 （安永４） 正月刊 （『新口吟咄川』1773）	山林堂 （江戸）	79	7	間ちがひ（重），魚心中（重），徳兵衛，ぢぐち，乞食，くやみ，異見，	15	福遊び，天神，大やしろ，ゑびす大黒，夢見，雪舟，雷（重），植木，たち物（重），狐附（重），楊枝，伊勢参り，やうじ，十六日，八百屋	13	つりがね夫婦，間ちがひ（重），御しきせ，魚心中（重），魚尽，巾着，柚金柑，ねこ，雷（重），たち物（重），四文銭，狐附（重），いが栗，
23	新落はなし　一**のもり**	来風山人序	1775 （安永４） 正月序	堀野屋仁兵衛	75	7	梅枝，間違，地獄，新刀，親指，切腹，百の札（重），	9	遠気色，伊勢物語，乗打，開帳，大額，火事見舞，閉帳，百の札（重），達磨	5	釣，儒者，夜見世，生酔，牽頭もち
24	**聞童子** （きくどうじ）	不知足 （小松百亀）	1775 （安永４） 正月序	遠州屋	58	4	落馬，反ごん香，ぶし，胆（重），	5	福守，占ひ，お初ほ，ねたり，たるの名（重），	7	吾妻橋，思付，なまこ，たるの名（重），まぐろ，胆（重），はりかね
25	**売言葉** （うりことば）	整々畔市和序	1776 （安永５） 正月刊	整〻畔	56	6	夜たか，ちりから，脇ざし，料理の伝授，てうちん，身なげ，	8	ばか息子，花火，むかで（重），げんぞく，二百十日，猫また，猫また（その二），開帳，	6	しミづ餅，むかで（重），桃太郎，離魂病，むすめ，玉手ばこ，

番号	書　名	著　者	刊行年	刊行者	話数	死	題	宗教	題	怪異	題
26	**鳥の町** （とりのまち）	来風山人	1776 （安永５） 正月序	堀野屋仁兵衛	64	6	潜上，根問，不孝，億病，地獄，講釈	13	狼藉，地口，刀の銘，ぶせふ者，信者，紅葉，香物，貧福，根問，茶代，占，大黒，雷	4	骸廻り，守刀，雷，雷，
27	新口　**一座の友** （いちざのとも）	不明	1776 （安永５） 正月序	池田屋伝兵衛	35	7	蜻の夢，賀の祝，自身番，中の町，四十七人，熊（重），辞世，	7	宗旨論，江戸の口者，玉の字，間違，遠目かね，熊（重），呉服屋	4	化ものうり，木曽山，飛脚，仙人，
28	**一の富**	見徳斎序	1776 （安永５）	本屋清治郎	59	5	鵺，打老児丸，蓮の上，極楽おとし（重），移従，	18	一の富，船宿，祭の行燈，黙礼，田村，観音，万歳楽，誓願寺，極楽おとし（重），声色，一枚起請，夫婦喧嘩，樺焼，精進落，孔雀鳳凰，生仏（重），朝湯，七つ目	5	うにかうる，十二支，福禄寿，生仏（重），七つ目
29	**高笑ひ**	陳奮翰 （大田南畝）序， 彡甫先生	1776 （安永５） ６月	堀野屋仁兵衛 （江戸）	72	10	息子，浅草，医師，幽霊，きほひ，番人，仕合，饅頭，赤銅，乞食	13	煙魔，新無間，道心，宥経，地蔵，大師，観音参，火燵，角力，無尽，きり〳〵す（重），甲酉，信州（重），	11	拾物，格子，奴，単物，きり〳〵す（重），雷，穏密，信州（重），膏薬，鸚鵡，手紙
30	**蝶夫婦** （ちょうつがい）	山手ノ馬鹿人此楓 （大田南畝）序	1777 （安永６） 正月刊	遠州屋	46	4	時代違の長物語（重），武士の嗜，盗人の逆追，万年のあらそひ，	8	初夢の大吉，鸛の見物，角大師の噂，神拝も見立，七福神の遊び，菅原へおふせ，清水寺の開帳，座敷上留理	8	時代違の長物語（重），乙姫の労咳，足留の盃，天狗の怪我，うさぎのしゆつくわい，狸のきんたま，泥亀の立腹，くらげも骨に逢，
31	**春岱** （はるぶくろ）	大馬鹿の多倉太伊助序	1777 （安永６） 正月刊	遠州屋	75	7	年忌（重），米の守，引導（重），犬の喧嘩，鷺と烏，近目，藪医師，	16	福神の夜遊び，福神の俄，宝船，年忌（重），無間の鐘，福神の借貸，引導（重），大師参，間違，頭痛の薬（重），悪魔払（重），初夢，御利生，智信勇，清水，奴こしもと，	13	焼塩と生塩，化物の臆病，述懐，犬の喧嘩，妙薬，頭痛の薬（重），悪魔払（重），五匁銀，鴨の病気，河太郎の火，蒟蒻の云分，白銀の利運，猩々舞，
32	**管巻** （くだまき）	糟喰人月風序	1777 （安永６） 正月刊	遠州屋	72	12	俵，達摩（重），丑時参（重），狐（其三），さん病，敵討，烏，盗人，隠居，血の池，鳩，心中，	15	初夢，鳶の者，達摩（重），丑時参（重），紅葉，初夢の二，狐，狐其二（重），狐其三，そば切，墨跡，乗物，鷲，むけん，羽衣	5	狐（重），狐其二（重），ともよ，腹中，人面瘡，

番号	書　名	著　者	刊行年	刊行者	話数	死	題	宗教	題	怪異	題
33	**畔の落穂**	不明	1777（安永6）正月序	遠州屋久次郎	57	3	うなぎ，つんぼ，鼠	7	うらなひ，小僧，きり〳〵す，こわいろ，いせ物語り，午王，七福神	5	提灯男，雷，鼻血，雷，土好
34	**喜美賀楽寿**（よろこびがらす）	伽藍堂無銘序	1777（安永6）正月序	不明	32	8	法力，とら息子，くやミ，麻疹見廻，しハん坊，勘弁者，馬糞（重），祝言	3	四万六千日，座頭の目，願がけ，	2	象，馬糞（重）
35	**さとすゞめ**	不明	1777（安永6）正月序	不明	47	3	髪切，欠落（重），大根売，	9	開帳，遠目鏡，大黒，御門跡，蛙（重），大仏，白狐，牛の夢，祈祷	6	蛙（重），百物語，初鰹，鼠，欠落（重），猿廻し，
36	鹿子餅後篇　**譚嚢**（たんのう）	馬場雲皷（木室卯雲）序・跋	1777（安永6）正月序	堀野屋	53	6	附子，切腹，忠臣蔵，吊ひ，助太刀，麻疹，	15	見せ物，あまいだ，地蔵，新宅，常念仏，巫女，暦，風鳥（重），四文銭，雷（其二），貧乏神，探幽，中堂，願人坊主，夢	6	猿，風鳥（重），雷，魔法，左官，紋伝
37	**春笑一刻**（しゅんしょういっこく）	千金子	1778（安永7）正月刊	富田屋清次，吉蔵	41	5	金が敵，ほうらい山，彼岸，かるわざ，精進，	8	初夢，酢の物，堂建立，あたまはり，無題（米つき），寺侍，うらなひ，五十服	6	問答，かミなり，ばけ物，ひきはた，浦しま，どうらん，
38	**乗合舟**（のりあいぶね）	風来散人序	1778（安永7）正月刊	柏原作兵衛	41	9	首売，おく病，なら漬，初物，鶴亀，せつしやう，御礼，嶋台（重），狩人	6	色男，仙台女，占，大食，眼の玉，宗論，	4	手足，かつぱ，眼の玉（重），嶋台（重）
39	**今歳笑**（ことしわらい）	泥田坊	1778（安永7）正月序	不明	34	3	うなき（重），つんぼ，鼠	8	歳玉，妹分，うらなひ，小僧，きり〳〵す（重），こわいろ，いせ物かたり，午王	7	雷，金もち，鼻血，きり〳〵す（重），名灸，うなき（重），雷，
40	**福の神**	大食堂満腹	1778（安永7）正月序	不明	68	7	八百蔵，脇差，早桶，和尚（重），ひがん，医師，鳥尽し，	3	すて子，和尚（重），女中，	14	元日，鷺，大かめ，鴨，ばけ物，猫，犬，黒焼，いもり，すつぽん，羅しやう門，雨，てんぐ，行者，
41	**鯛の味噌津**（たいのみそづ）	新場老漁（大田南畝：御家人）	1779（安永8）正月刊	遠州屋（江戸）	45	3	土左衛門，佐理行成，心中	9	三十ふり袖，ゑびす膳，仁王，栄螺，佐次兵衛（重），ばくちうち，不動，かゞ見もち，野島地蔵	5	佐次兵衛（重），足袋，魚哥，鷺，角力，

番号	書　名	著　者	刊行年	刊行者	話数	死	題	宗教	題	怪異	題
42	**寿々葉羅井** (すすはらい)	志丈序	1779 (安永８) 正月刊	竹川藤助	60	7	役者の女房，人相見(重)，借銭乞，禿，疱瘡，座頭(重)，どろぼう(重)，	13	女郎の代参，あんけら，かい帳，人相見(重)，女のはだか参，開帳の上ゲ物，使，かけあらそひ，ねじやか，座頭(重)，どろぼう(重)，地蔵，仏のむしん	10	赤貝，雷ぎらい，桃太郎，なががたな，かつぱ，はつ茸，ぱちぴん，馬士，かけあらそひ，鬼むすめ，
43	**気のくすり**	黒狐通人序	1779 (安永８) 正月刊	不明	55	8	神木(重)，饅頭，土手，心中，手前勝手，遠矢，貧乏者，茶之間，	8	四神の簇，神木(重)，羅漢，十八日，隠居(二)，木兔，火の見(二)，大黒天	3	狼，井戸，仙人，
44	**御笑酒宴** (ごしょうしゅえん)	放口斎千冲	1779 (安永８) 正月序	不明	19	4	かう利の怨霊，新宿(其三)，疱瘡神(重)，つんぼ，	5	大黒(一，二)，七福神，疱瘡神(重)，神のう，	1	信濃もの
45	珍話　**金財布** (かねのさいふ)	不明	1779 (安永８) 正月序	堀野屋仁兵衛	45	5	役者，利屈，墓参(重)，なら漬，酒売	4	富，しわんぼう，精進日，墓参(重)	5	佐次兵衛，馬士，徳利，狐，産，
46	**万の宝** (よろづのたから)	四方赤良序	1780 (安永９) 正月刊	不明	51	3	手なしの巾着切，赤幽霊，三途河の爺(重)	17	七福神日待噺，山伏の狐つき(重)，大黒頭巾嫌，鶴泥亀と遊ぶ，極月の富士詣，富士をしらぬ西行(重)，所化の戯れ，高砂の杉，黒イ鷺，塔大工の眩暈，すた〳〵やつこ，三途河の爺(重)，仁王の色男，毘沙門の笑顔，八丈島の疱瘡，若衆の飛清水，大黒のつり竿，	15	山伏の狐つき(重)，闇の夜の花見，下戸の猩々，ヘマムシ山水天狗と口論，雷の臍ぎらひ，梟の昼ばたらき，男の産，常世が牛，富士を知らぬ西行(重)，舌きり烏，白いからす，蛤貝の片思ひ，焼火の丁子頭，真昼間の光り物，隠里の大道
47	落咄　**大御世話** (おおきにおせわ)	神真人	1780 (安永９) 正月刊	竹川治助	37	3	無心中，悔，文字，	6	四の字きらい，駄賃馬，仁王，御神体，茶の湯，大食，	5	夜ばい，白狐，狩人，化狐，蟻，
48	落し噺し　**明朝梅** (あけのうめ)	不明	1780 (安永９) 正月刊	不明	23	3	あいほれ，とむらひ，しわんぼう，	3	番太郎，女郎買，無間の鐘，	2	万作，鍋三，
49	**初登** (はつのぼり)	不明	1780 (安永９) 正月序	堀野屋仁兵衛	38	4	藪医，地獄，噂噺，人霊，	12	百人一首，満願，物忘れ，参詣，角力，長居，咒，箒，大仏，宗論，夢判，願掛(重)	1	願掛(重)

番号	書　名	著　者	刊行年	刊行者	話数	死	題	宗教	題	怪異	題
50	落咄　**鼠の笑** (ねずみのわらい)	夢多楽舎出法題序	1780 (安永９) 正月序	不明	43	2	鶴吉，あん摩，	8	せん家，天神，地蔵むすめ，山下，一月寺，初ゆめ，きのへねの米，米や	6	ぢゞいとばゞあ，桃太郎，かち〳〵山，した切すゞめ，さるかに，はやのミ込，
51	**笑長者** (笑い長者)	不明	1780 (安永９) 正月序	不明	47	2	丑の時参り(重)，養生，	12	丑の時参り(重)，氏神，とんだりんき，吸物，隠居(其二)，木兎，七福神，礼の間違，少気，おんな，日まち，六部，	1	戸棚の喧嘩，
52	当世新話　**はつ鰹**	新場散人 (大田南畝：御家人)	1781 (安永10) 正月序	堀野屋仁兵衛 (江戸)	37	1	切腹，	8	さゞゐ，夜の精進，世良田，めくり，鰍，白狐，御門跡，蛇，	5	さる，木喰ひ，猿廻し，蛇(重)，猟人，
53	**いかのぼり** (『笑の種初編 1777』)	不知庵井蛙序	1781 (安永10) 正月序	不明	22	1	身投，	6	金銀星，大こく，大こく，もんもう，鑓指南，初ゆめ，	2	天狗のやとい，凧，
	合計				2843	298	10.5(%)	388	13.6(%)	307	10.8(%)

(重)は重複して分類されている

「死」：殺人，自死，葬式，寿命など死に関わる話題．極楽，地獄などの来世，呪詛，幽霊の出現，人間以外の死，質入れの隠語も含む．

「宗教」：寺社参拝，僧侶・神官．神仏・七福神などに宗教に関する話題．宗教習俗・暦・占いも含む．

「怪異」：荒唐無稽な話題．雷・鬼・化けものなど．人間以外の生物，無生物が口を聞くなどを含む．

Death as seen in An'ei Era *Kobanashi* Books

OHMURA Tetsuo

It is said that one of the characteristics of the religious behavior of modern Japanese people is in the fact that, despite not believing in any specific religion, visits to graves, Buddhist temples and Shinto shrines are considered indispensable. How did this understanding of religion and of death and life develop? When we attempt to look for the source of these values in the views of death shared by early modern Japanese people, we realize that such is a surprisingly difficult task. This is because commoners, unlike professional religionists and political leaders, had very few opportunities of expressing their own ideas.

Therefore in this paper we focused on Edo-period humorous tales (*shōwa*) , as depicted in An'ei era *Kobanashi* books. These works were popular in Edo for about ten years, being produced among the common people and enjoyed by them. Since the act of laughing presupposes a shared set of common values, these books can then be regarded as reflecting coeval understandings of death and life.

I have classified and analyzed 2,843 tales collected in 53 *Kobanashi* books published in Edo between 1772 and 1781. As a result, we learned that death is the main topic of 10.5% of these tales. Murder stories were the most numerous, but tales regarding suicide, one's final moments, longevity, the afterlife and ghosts were also frequent. Furthermore, "health issues", considered to be the first cause for suicide in contemporary Japan, was completely absent. From this we could conclude that at the same time they wished for a long life, in case of impasse people would still sometimes chose death: the battle between life and death was not as fierce, there being a high affinity with the latter.